

魯迅との交流が生んだ日中友好の架け橋

「私の目から見て、また私の心において、彼は偉大な人格である。その姓名を知る人がよし少ないにせよ。」

魯迅「藤野先生」(竹内好訳)より

中国の文豪・魯迅が終生の恩師として仰いだ福井出身の医師・藤野嚴九郎。国を越え、師弟として心を通わせた2人の惜別から100年の歳月が過ぎた。

魯迅との出会い

1874(明治7)年、現在のあわら市下番で、江戸のはじめから続く医師の家に生まれた厳九郎は、1904(明治37)年に仙台医学専門学校(現在の東北大医学部)の解剖学教授に就任。同年、中国からの留学生と

して入学した周樹人、後の魯迅と出会うことになる。当時、日清戦争に勝利した日本には、中國を軽んずる風潮が漂っていた。嚴九郎は非常に厳格な教師として、不勉強な学生からは敬遠されていた。ある日、魯迅は厳九郎から研究室に呼ばれ、解剖学の講義ノートの提出を求められる。そして2、3日後、返されたノートには朱書きで脱落部分が書き加えてあるばかりか、文法的な誤りまで、すべて訂正してあった。嚴九郎の丁寧な指導に魯迅は驚きと感激を覚える。

医師として生きる

しかし、母国・中国を憂いた魯迅は、一年半後に文学の道へ転向を決意。退学することを告げる

しむこともあった。それでも患者のためには高価な薬も惜しみなく使つたという。

師弟愛は日中友好の礎に

が書かれていた。裏側には「惜別」の文字

のためには高価な薬も惜しみなく使つたという。この添削をきっかけに、二人の師弟愛は徐々に深まっていった。

一方、帰国した魯迅は文学革命の指導者として活躍。1926

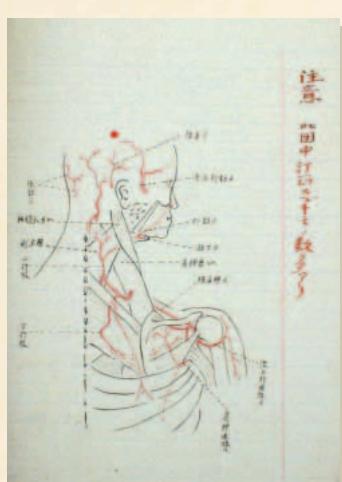
(大正15)年には、嚴九郎との思い出をつづった「藤野先生」を発表した。嚴九郎の消息を知りた

いと願つた魯迅は、日本での『魯迅選集』出版にあたり、この作品を入れることを熱望。その甲斐あって、選集を読んだ嚴九郎は魯迅が偉大な作家となっていることを知り、大いに喜んだといふ。

しかし、嚴九郎は魯迅の恩師であつたことを鼻にかけることも



魯迅との別れ際に手渡した写真(複製)。
裏には「惜別 藤野 謹呈周君」の文字



魯迅の講義ノート(複製)。朱書きが嚴九郎の添削した部分。ノートは全部で6冊に渡った(藤野嚴九郎記念館所蔵)



嚴九郎が三国で住んでいた当時の家を移築した『藤野嚴九郎記念館』の内部。診療に用いた薬棚や調度類が復元されている(あわら市舟津)



足羽山にある『惜別の碑』。魯迅と嚴九郎の交流を記念して、1964(昭和39)年に建てられた

して入学した周樹人、後の魯迅と出会うことになる。当時、日清戦争に勝利した日本には、中國を軽んずる風潮が漂っていた。嚴九郎は非常に厳格な教師として、不勉強な学生からは敬遠されていた。ある日、魯迅は厳九郎から研究室に呼ばれ、解剖学の講義ノートの提出を求められる。そして2、3日後、返されたノートには朱書きで脱落部分が書き加えてあるばかりか、文法的な誤りまで、すべて訂正してあった。嚴九郎の丁寧な指導に魯迅は驚きと感激を覚える。

この添削をきっかけに、二人の師弟愛は徐々に深まっていった。

藤野嚴九郎記念館にある藤野嚴九郎と魯迅の像(あわら市舟津)

関連情報

- ◇再読「藤野先生」特別展
10/14(土)～29(日) 県国際交流会館
11/12(日)～26(日) 若狭図書学習センター
- ◇特別講演「魯迅と藤野嚴九郎－そして日中関係を考える」
講師:寺島実郎氏(日本総合研究所会長)
10/22(日) 13:30～ 県国際交流会館